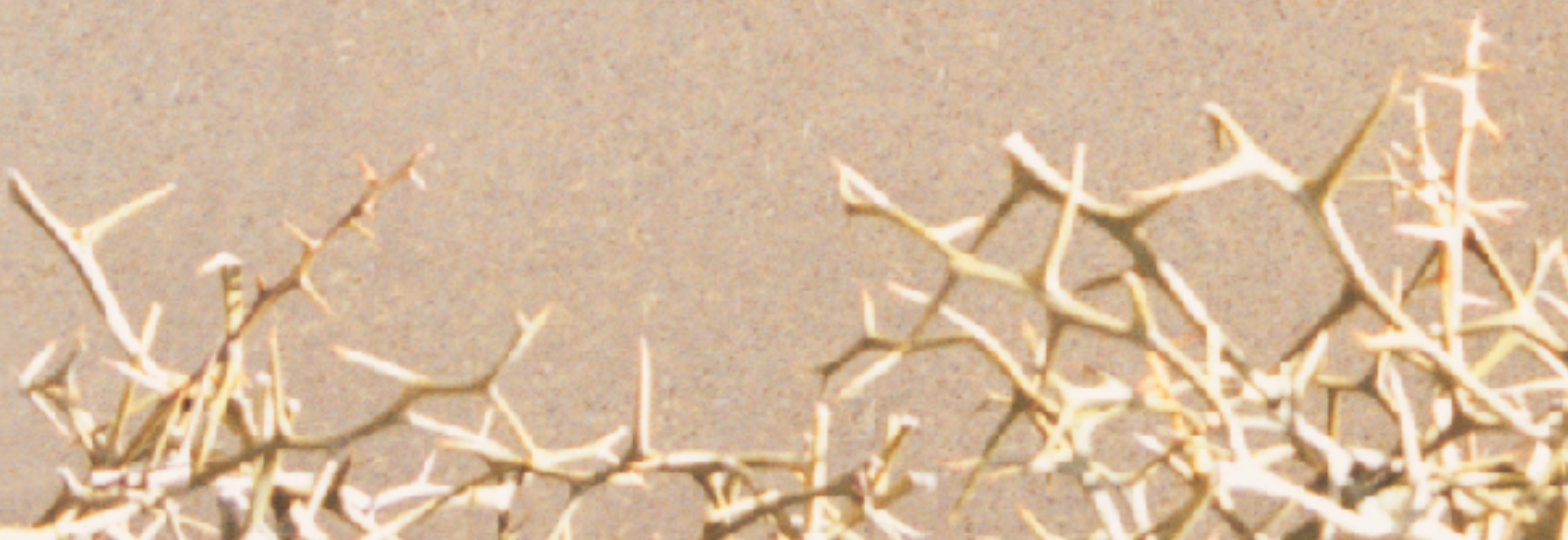


(社)長野県建築士会諏訪支部50周年記念誌

諏訪の建築



監修 藤森照信



序 章

『科野（信濃）の國洲羽（諏訪）の海（湖）に至るとき、建御名方（タケミナカタ）神申さく、われこの國を除きて他処には行かじ云々』建御名方命が、諏訪入りした様子が古事記にこう記されている。

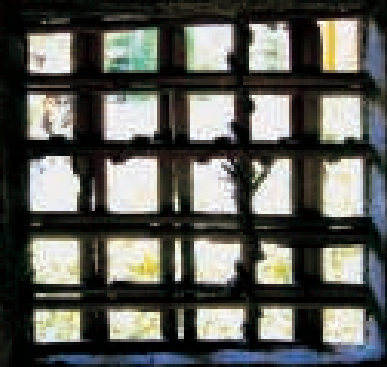
諏訪神は風の神として中央にも知られ、武神・狩猟神としても広く信仰され全国に数多く分社された。奈良時代には信濃之國から分離独立して諏訪之國が誕生した。中央政府が無視できないほど、諏訪神社の信仰圏や政治力は大きくなっていた。しかしその後、諏訪之國は再び信濃之國に併合された。歴史に刻まれた諏訪之國はたった十年の命であった。

諏訪は古くから交通・物流の要所であり、鎌倉街道・中山道・甲州道中などが交差し東西・南北の文化の影響を受けた。鎌倉時代には幕府が全国の武士を霧ヶ峰に集め、武芸を競わせる御射山祭が行われていた。幕末には討幕に燃える水戸天狗党や赤報隊が相次いで諏訪入りした。近代に入ると輸出産業の製糸業が栄え、西洋文化の影響も受けた。それは現在の精密・電子・情報産業にも繋がっている。

『信州人』は理窟屋で議論好きなことで知られている。その典型が『信州人』の中でも唯一『・・・人』と呼ばれている『諏訪人』である。長い歴史の中で、多くの文化に出会い、徹底的に議論し合い、時には千万人を敵に廻しても我が道を往く『諏訪人』には諏訪之國のDNAが流れているのだろう。



～諏訪之國の建築DNA～



発刊によせて

(社)長野県建築士会会長 林 太 一

この度、長野県建築士会諏訪支部が50周年を迎えられ、記念の写真集「諏訪の建築～諏訪之國の建築DNA」を発行するにあたり、一言お祝いを申し上げます。さて、昭和25年にそれまでの市街地建築物法から建築基準法が制定され、翌年の昭和26年には建築士法が制定されました。それに伴い建築士会諏訪支部が誕生し、50年の永きに渡り会員の皆様や歴代支部長さん役員の皆さんの弛まざるご苦勞とご努力で発展されましたことに心よりお慶び申し上げます。

戦後の復興の時期に建築基準法と建築士法が制定され、建築士の役割は社会的に広く認められ、全国で活躍いたしました。その後、高度成長時代に入り建築士の役割はますます重要なものへと変化してきたと思います。しかし先駆的な役割を演じ、大量生産・大量消費時代を迎え、駆け足で時代の先端を走ってきましたが、何か置き忘れてきた感じがいたします。

21世紀を迎え、地球環境の保全が強く叫ばれております。また、二度の大戦と現在の民族紛争や宗教の違いにより保存すべき歴史的な建造物が失われつつあります。日本の文化の継承を怠ることなく、私ども建築士は伝統的な技能、技術、歴史的な建築物を保存し、その中に未来への価値を見出し、地球環境保全やまちづくりに指導的役割を演じることが大切だと思います。

今、社会は大きく変化しようとしております。新しい時代に向けて幾多の困難に挑戦し、過去の経験を踏まえ、また反省して郷土の未来に役立とうと思います。2000年には住宅の品質確保に関する法律が施行されました。その他にも建設関連の法が制定、施行され建築士の社会的役割は大変重要なものになりました。過去十数年で住宅に関する考え方も大きく変わりましたが、住宅は人が生活する器だと云う基本的なものは変わらないと思います。人に優しく、環境に配慮し、安全で健康なまちづくりを含めた住空間を作るために建築士があると思います。

この様な時期に建築士会諏訪支部が、諏訪の建築物の写真集を発刊されることは大いに意義のあることだと思います。諏訪の地には縄文時代よりも古くから人々が暮らしており、諏訪湖を中心として川や山の豊かな食物に恵まれ、南から北から様々な文化を吸収し、発信して発達してきたと思われます。神代の時代にまで遡る諏訪神社、縄文のビーナス、朝日将軍木曾義仲、多くの旅人が行き交う中山道等歴史を飾る様々な出来事を諏訪の建物は見てきました。諏訪の古い建築に歴史的価値を見出し、次の時代21世紀の私どもの指針としたいものです。

諏訪湖を中心に八ヶ岳を望み山紫水明の諏訪の郷土を愛する長野県建築士会諏訪支部の皆様がいつそう団結され、支部長さん始め関係各位のご協力に深甚なる敬意を表し、支部のさらなるご発展と会員の皆様方のより一層のご健勝とご多幸を祈念申し上げてお祝いの言葉といたします。

発刊にあたって

(社)長野県建築士会諏訪支部

50周年記念事業実行委員長 下 倉 孝 繁

連なる富士赤石山系の谷間に流出する唯一の河川・天竜川の源流なる諏訪の湖から八ヶ嶺の裾野に広がる諏訪盆地は信濃の国一之宮諏訪の大御神をシンボルと仰ぎ、縄文文化の古より続く先住の人々が豊かな山野河湖の恩恵からなる農業漁業を礎とした生活の中で連綿と続き育まれた数々の土着の伝統が息づく地域であります。先人達が峠を越えて諏訪の地にもたらした数々の新技術は文明開化の波と共に一世を風靡した蚕糸の技や冬の寒天製造等々を諏訪発祥の産業までに発展・飛躍させ、近代には東洋のスイスと云われる精密工業による先進技術の集積地ともなりました。景気低迷の波が押し寄せる今日であっても諏訪人達の躍進の血潮は脈々と流れ、それは建築界においても土着の在来工法から社寺建築へ又和風から洋風様式への変化と近代建築への変遷にも先人達の技術や伝統は受け継がれております。その古い伝統や職人の技が今なお見ることが出来る半世紀を遡った土着建物の中から『生活の中の建物』をテーマに建築士会50周年の星霜の節目として此の本をまとめました。

今回発刊される写真集は、諏訪における縄文の時代より続く茅葺きの住まい以降の時代や経済・文化・人々の生活様式や用途に合わせて様々な変化を遂げた建築物、例えば街道を行き交う人々の宿場であり憩いの場としての旅籠、交流生活と街区形成の基幹となる本陣（脇本陣）や問屋場等の商家、文明開化に伴う教育の普及により集える場から教え学ぶ場へと変わった学舎、そして政経を司る公共の館等の用途によって生まれ育まれた建物や現在では再建不可能な建造物も多数掲載されており、建物が和風から洋式風へと変化する様や土塗のたたずまいから財宝の象徴的な土蔵造りとそれに携わる職人の技術が芸術の域まで達した絵様の表現や蚕糸業華やかな時代を偲ばせる高層建築の繭倉等の伝統的な技術と芸術性の流れ持つ建造物を興味深く見て戴けることと思います。今なお生活の中で先賢先達の技術と伝統が残存し共に歩み続けている建造物の記録を目的とした建築士会諏訪支部50周年記念事業の写真集が建築業界の進展向上となる道標としてお役に立てて頂ければ幸いです。

なお写真集編纂に当たり諏訪の若き建築士のアイデアを生かし情熱的な収集活動を行いました。写真・資料等収集の期間が短い上に建物が広範囲に点在するため収録漏れの貴重な建物や資料があると思われ。また今回未収録でした社寺仏閣関係の建物に関しても次回に譲り、掲載出来なかった建物と併せて丹念に調査を致してから改めて編集したいと思っております。その折りには再度ご協力をお願い致します。

最後にご多忙のなか私たち諏訪支部の為に作品監修を快諾して頂いた東京大学教授藤森照信先生に敬意と、故郷の士会の進展向上の為に賛同頂き資料提供や建物の掲載をご同意して頂いた関係各位皆様及び長野日報社に対して謝意を表すと共に収集編纂に当たられた各会員を始め実行委員の精力的な活動とご苦勞に対して厚く御礼を申し上げます。

諏訪建築史

建築史家

東京大学教授 藤森 照信

諏訪の建築史は、縄文時代からはじまる。縄文のヴィーナスから知られるように、この地の縄文文化は日本列島の中で最も充実していた。青森の三内丸山遺跡のように大規模ではなかったが、美へのセンス、技術という点では明らかに三内丸山をしのぎ、量の青森、質の諏訪という並立状態にあったのである。

建築はもちろん残っていないが、尖石遺跡には竪穴住居の復原がなされており、往時の集落の様子をしのぶことができる。復原をなしたのは、日本の近代建築史に輝く建築家の堀口捨巳で、また、登呂遺跡に続く日本で二番目の復原原始住居としても大事である。

縄文時代後は、弥生時代、古代、中世と続くのだが、その間の諏訪の建築事情はほとんど分かっていない。諏訪大社があり、仏教寺院が建てられたわけだが、建築の様子をしのぶ史料に乏しい。古代、中世の諏訪建築史は空白の時代というしかないのだが、その空白のただなかに一つ屹立するのが御柱にほかならない。御柱の起源については諸説あるが、縄文時代の“柱立て”の宗教行事までさかのぼるのはまちがいないだろう。とすれば、日本はおろか世界でも現存最古の建築系祭祀ということになる。

近世すなわち江戸時代に入ると、諏訪の建築は活況を呈する。まず第一に注目されるのは、立川流の隆盛で、立川家は上諏訪に本拠を置き、東は関東一円から西は京都まで、幾多の社寺仏閣を建設していった。江戸時代には各地で〇〇流、〇〇大工と称する大工流派が成立するが、立川流ほど広い範囲に及んだ例はない。山国にありながらそんな広範なコントロールが可能だったのは中仙道、甲州街道と言う二つの大動脈の接点に位置したことと、部材の規格化を進めたことの二つのおかげだろう。立川流は建築彫刻を売りとし、彫刻だけは諏訪から送っている。実例は上社の本殿が名高い。立川流の陰にかくれがちだが、諏訪にはもう一つ下諏訪に本拠を置く伊藤家の大隈流があり、下社の社殿が代表作となっている。

江戸時代を通して充実したものに、民家がある。現在見ることでできる民家の形は、江戸時代に成立したものと考えていい。それ以前は、ごく小規模で、実用一本の小屋のようなものだったと推測される。まず本棟造りが目立つが、これの中心は松本塩尻方面である。全国的に見て諏訪の民家が興味深いのは、珍しい作り方がいくつも伝わっていることで、たとえば、“建てぐるみ”と呼ばれる、倉を住宅の一部にとりこむやり方がある。本来、倉は防火のため独立させるものなのに、一体化したのは防寒のためだろう。あるいは古代の防寒寝室の“塗りごめ”に起源するのかもしれない。

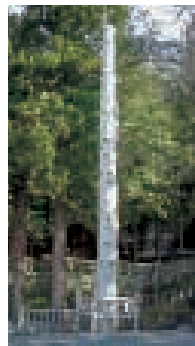
八ヶ岳山麓には“せいろ造り”（校倉造り）の倉があり、全国的にもきわめて珍しい。また、同地域には白樺の皮を葺いた民家がつい近年まで残っており、これも日本で唯一の現存例であった。

諏訪の倉には、とくに茅野市方面に“鰻絵”が描かれている。色漆喰を盛りあげてつくるレリーフだが、江戸時代のものではなく、明治になってから“伊豆の長八”系の左官によって伝えられている。

尖石遺跡復原竪穴住居／茅野市



御柱



白岩観音堂（立川流）／茅野市



上社本幣拝殿（立川流）／諏訪市



現在、民家で屋根葺材として目立つものに平石（鉄平石）葺きがあるが、これは明治になってから使用されるようになったもので、江戸期にはなかった。瓦が寒さで割れやすく、その代用として、防火性を求められる倉の屋根に葺かれ、さらに住居にも葺かれるようになったと考えられる。

諏訪の江戸時代の民家の屋根は、茅葺き、板葺き（玉石を並べて押さえる）、樹皮葺き（玉石で押さえる）の三つであった。

江戸が終わり、近代が始まる。諏訪の近代を切り開いてくれたのは、岡谷の製糸産業であった。もし製糸がなければ、旧街道の没落とともて地の利を失い、沈滞に向かった可能性もある。

製糸の建物は、まず工場だが、残念ながらほとんど壊されている。次は倉庫で、さいわいいくつか残されている。製糸用の繭倉は、他の一般的倉庫とまるでちがう姿を見せてくれる。ふつうの倉庫は、重量物が入るため、平屋が基本でせいぜい二階止まりだが、繭倉は三階、四階も平気で、吉田館繭倉庫はなんと六階建てだった。日本記録はおろか世界記録にちがいない。

製糸関係としては、工場、倉庫のほかに、事務所と製糸家の住宅があり、前者としては岡谷の旧片倉製糸事務所（現・中央印刷）、後者としては岡谷の一山カ林組の林国蔵邸がある。林国蔵邸は、金唐紙が日本で一番たくさん使われている建物としても知られる。

上諏訪の片倉館も、製糸関係といえるであろう。手がけたのは、台湾総督府の設計者として知られる建築家の森山松之助で、様式はゴシック様式をベースとする。日本を代表する近代的な温泉リゾート施設として名高い。

戦後になってから、八ヶ岳山麓に高原リゾートが開発され、次々に別荘建築が作られてゆくが、それらに混じって、東京の戦前のすぐれた住宅が移築されてくる。その代表が、明治後期を代表する洋館として名高い旧渡邊千秋伯爵邸（現・トヨタ記念館）で、トヨタによって移された。渡邊千秋は岡谷出身だがトヨタはそのことを知らずに移したのだという。

以上のように古代より綿々とすぐれた建物が諏訪には作られてきた。それらの歴史的建物は、国や市町村の文化財に指定されて守られているものもあるが、多くは存在すら知られない状態にある。この本は、はじめてその全貌を明らかにした貴重な成果といえよう。とりわけ、民家については充実している。こうしたすばらしい民家を後世にどう伝えて行くかという問題が、現代のわれわれに課せられているが、その一つの方法として“諏訪民家村”の設立が必要なのではないだろうか。

下社春宮弊拝殿（大隈流）／下諏訪町



古田館六階建繭倉／岡谷市



神長官守矢史料館（藤森照信氏設計）／茅野市



目 次

すまう 007

武家住宅／大屋根・本棟造り／かいや／うちぐら（建てぐるみ）／せいげ（せがい造り）富士見・原／茅野／上諏訪／下諏訪／岡谷／蔵造り／洋館・和洋折衷／別荘

とまる 033

葛木宿／原の茶屋／金沢宿／下諏訪宿／その他

つくる 039

製糸／醸造／寒天／穴倉／その他

あきなう 055

街道沿い／蔵造り／飲食／看板建築／その他

おさめる 063

なまこ壁／下見板／その他／せいろ蔵／おとし蔵・尺八蔵／はんや（萩屋）

つどう 073

片倉館／舞屋／お堂／集会所／その他

まなぶ 081

学校／分教場

いやす 085

病院・医院

おおやけ 089

役場・番所／郵便局・銀行／屯所・ポンプ小屋

ちまた 093

富士見・原／茅野／上諏訪／下諏訪／岡谷

まどめる 101

鍍絵／石置き屋根・葺き込み屋根・石葺き屋根
雀踊り（菱飾り・山型）・せき板納まり他

諏訪地方の特徴的な住宅としてまずあげられるのが、土蔵を母屋と一体化して造る、建てぐるみと呼ばれる形式である。この土蔵をうちぐらと呼んでいる。これは敷地の狭さ、寒い冬に戸外に出る必要がないこと、家の断熱性向上のためといわれる。次に、山浦地方に多く見られ、大軒造りと呼ばれる軒の出の深い形式がある。一般的なせがいつくりの出梁と垂木の二重構成に対し、出梁、登り木、垂木の三重で構成され約9尺の軒の出となる。登り木、垂木の二重構成のものも造られている。庭先の収穫物を霜から護る術と考えられる。いずれも諏訪人の合理的な側面を見ることができる。

松本平に多い本棟造りは江戸時代には庄屋だけにしか許されなかった妻入りの堂々とした民家である。この地には、始めから本棟造りで造られたものの他、明治以降に茅葺き屋根を取ってこの形にしたものも多い。本式の本棟造りの平面は正方形に近い奥行きのものだが、これらは長方形の平面であり、むしろ大屋根造りと呼ぶのが妥当だろう。

製糸業の発展により明治後期から大正、昭和初期にかけて養蚕を目的とした総二階建の大きな家が建てられるようになる。茅葺き屋根をとり、二階をあげる家も増えただろう。製糸業によって蓄えられた富は旧林家住宅のような企業家の気概を感じさせる豪華絢爛な住宅をこの地に出現させた。それと対照的なものが質素儉約を重んじた片倉家の茅葺きの住宅である。

明治以降、世の中の変化は凄まじく、その時代の流れを受け住宅も大きく変化してきた。製糸家の邸宅、洋館、和風、モダニズム、別荘、この地域にもさまざまな波の痕跡を見ることができる。そのような中であって現在も静かに住み継がれている茅葺きの民家があることを私たちは忘れてはならないだろう。

穴山のかいやの家並み（田中岐美子氏蔵）



すまう



旧渡辺家住宅／岡谷市長地／江戸時代



武居武雄生家／岡谷市堀の内／江戸時代





片羽の医事門の家／諏訪市諏訪／明治初期一部江戸後期

下級武士の住宅は私生活部分のみものが多いが、上級武士のものは奥の私生活の場と表側の式台、玄関、座敷といった公の部分を持つ。長屋門を構えるのが正式で、柱を2本立てて扉をつけた門は略式である。三人の大臣を輩出した旧渡辺家住宅は下級武士、島崎（現高島）の志賀邸は上級武士の住宅の特徴を持つ貴重な遺構である。



志賀邸／諏訪市高島／江戸安政年間



すまう



今井の本棟／岡谷市今井／江戸天保年間



柴宮の本棟／岡谷市長地



塚間町の本棟／岡谷市塚間町



天竜町の本棟／岡谷市天竜町



神宮寺、権祝邸／諏訪市中洲



柏原の本棟／茅野市北山／平成2年に茅葺から本棟に



北大塩の本棟／茅野市米沢／明治末期



堀の本棟／茅野市湖東／昭和35年に茅葺から本棟に

すまう



島木赤彦の家／下諏訪町高木



瀬沢新田の茅葺き／富士見町落合



立沢の茅葺き／富士見町本郷



高森の茅葺き／富士見町境



上古田の茅葺き／茅野市豊平／江戸前期



芹ヶ沢の茅葺き／茅野市北山／江戸天保年間頃



田沢の茅葺き／茅野市宮川



高森の茅葺き／富士見町境



普門寺の茅葺き／諏訪市四賀



中道の茅葺き／茅野市泉野



大熊の茅葺き／諏訪市湖南／江戸末期

すまう



神戸の建てぐるみ／諏訪市四賀／昭和20年頃



元町の建てぐるみ／諏訪市元町／明治末期



元町の建てぐるみ／諏訪市元町／大正15年に2階を増築



元町の建てぐるみ／諏訪市元町



大和の建てぐるみ／諏訪市大和／明治後期



田中町の建てぐるみ／下諏訪町田中町



木舟の建てぐるみ／茅野市金沢／明治



安国寺の建てぐるみ／茅野市宮川／明治



安国寺の建てぐるみ／茅野市宮川／大正中期



塚原の建てぐるみ／茅野市ちの／明治後期



小町屋の建てぐるみ／茅野市宮川／明治後期

すまう



大久保のせがい造り／原村大久保／大正



中新田のせがい造り／原村中新田／明治40年頃



御作田のせがい造り／茅野市豊平／大正



柏原のせがい造り／茅野市北山／昭和12年



山田のせがい造り／茅野市玉川／昭和29年



北大塩のせがい造り／茅野市米沢／大正末期

すまう



立沢のせがい造り／富士見町本郷



烏帽子のせがい造り／富士見町落合



神戸の2階建て／富士見町富士見／明治初期



瀬沢新田の2階建て／富士見町落合



烏帽子の2階建て／富士見町落合



中新田の2階建て／原村中新田



菖蒲沢の茅葺型／原村菖蒲沢／江戸文政期



払沢の茅葺型／原村払沢／江戸後期



払沢の茅葺型／原村払沢／江戸末期頃

すまう



柏原のせがい造り／茅野市北山



塩之目の2階建て／茅野市豊平／江戸末期



下古田のかぶと造り／茅野市豊平／明治後期に移築



鋳物師の家／茅野市米沢／大正



田道の家／茅野市玉川／明治末期



木舟の2階建て／茅野市金沢／明治



上槻木の2階建て／茅野市泉野／昭和初期



板室の2階建て／茅野市宮川／明治後期



仲町の2階建て／茅野市ちの／昭和8年



宮川茅野の2階建て／茅野市宮川

すまう



湯の脇の家／諏訪市湯の脇



普門寺の2階建て／諏訪市四賀



湯の脇の3階建て／諏訪市湯の脇



大熊の多重屋根／諏訪市湖南



旧帝国ホテルの設計で知られる世界的建築家フランク・ロイド・ライトに師事した柴田太郎の設計による住宅である。テラスのデザインや玄関廻りの大谷石のディテールにライトの雰囲気を感じられる。また、破風板などが諏訪地方のデザインをアレンジして使われている。



湖岸通りの家／諏訪市湖岸通り／昭和6年

すまう



大社通りの町屋／下諏訪町大社通り／昭和初期



大社通りの町屋／下諏訪町大社通り／江戸時代



大社通りの町屋／下諏訪町大社通り／江戸時代



大戸の家／下諏訪町東町下／江戸～明治





萩倉の2階建て／下諏訪町萩倉



桜町の2階建て／下諏訪町桜町／明治初期



大門の2階建て／下諏訪町大門
／武家屋敷の門を移築



青雲荘／下諏訪町立町



大門の家／下諏訪町大門

すまう



進取の気概溢れた製糸家林国蔵の旧宅である。大隅流棟梁伊藤佐久二による豪壮な造りと、立川流派の清水虎吉による細密な彫刻、金唐紙を張った荘厳な和室、寄木の板張りの美しい洋館、洋館の中に併設された茶室など当時の技術の粋が見られる。



旧林家住宅／岡谷市御倉町／明治30年代



片倉家住宅／岡谷市川岸岸上／初代兼太郎生家



製糸家の家／岡谷市銀座／大正末期／吉田館



製糸家の家／岡谷市湖畔／明治30年頃／全組



製糸家の家／岡谷市加茂町／全宮坂製糸



製糸商の家／岡谷市湖畔／明治40年頃／現ヤマニ信州館

すまう



御倉町の家／岡谷市御倉町



天竜町の2階建て／岡谷市天竜町／明治中期



天竜町の2階建て／岡谷市天竜町／昭和10年頃



本町の家／岡谷市本町



本町の2階建て／岡谷市本町



坂室の蔵造り／茅野市宮川／大正／2階は寒天倉庫



大社通りの蔵造り／下諏訪町大社通り



元町の蔵造り／諏訪市元町



すまう



旧薩摩別荘／富士見町落合／昭和11年



トヨタ記念館／茅野市北山／明治38年／設計 木子幸三郎
／昭和39年東京高輪の旧渡邊千秋邸を移築



湯の脇の洋館／諏訪市湯の脇



湯小路の洋館付住宅／諏訪市小和田／昭和2年



大手町の洋館付住宅／諏訪市大手





富ヶ丘の家／下諏訪町富ヶ丘／大正初期



御田町の家／下諏訪町御田町／昭和11年



赤砂の家／下諏訪町東赤砂

すまう



白林荘／富士見町富士見／大正13年



白林道場／富士見町富士見／山梨白州の養蚕農家を移築



富士見ヶ丘の「白林荘」は白樺の林から名付けられた。政治家犬飼毅（号・木堂）が引退後の余生を過ごす為に、別荘として大正13年に建てられた。敷地内には母屋と、離れの老栗（ロウリツ）亭、山梨県白州町の養蚕農家を移築した白林道場の三棟がある。



無藝荘／茅野市北山／旧小津安二郎別荘

明治38年の中央線の開通から約100年、三世代の時が過ぎようとしている。かつて賑わった宿場町に残る建物も老朽化が進み、人々の記憶と共に消え去ろうとしているが、先人の築いたまちなみなどの文化を大切に守り育てる動きも出てきている。

鳶木宿は大火や水害が多かったという。そのためか、あるいは後の改造によるものかわからないが建物は格子や装飾をもたない簡素なものが多く、それらが整然としたまちなみを形成している。近年、区民の要望により本陣の表門が復原された。

金沢宿には出梁や持ち送りに美しい彫刻を持つ茶屋、しゃれた曲線格子を持つ旅籠や出梁造りの馬宿など貴重な建物が残る。江戸時代、二階建は禁止されていたため（旅籠は二階建てが許されていた）中二階（ずし二階）を持つものが多いが、出梁造りや装飾を持つものは旅籠や茶屋などに多く、一般の伝馬屋敷は一階部分に底のついた形式が多い。

下諏訪宿は今日も諏訪大社下社の門前町、温泉地として賑わい、そのため建て替えも進んだが今なおいくつかの町屋や旅籠が残り、これらの宿場町のまちなみを大切にしながらまちづくりが行われている。ここには諏訪地方では唯一、本陣の建物が残る。洗練された京風数寄屋造りの座敷と庭園からは、当時の宿場町が、流通や情報網の実権を握ることで富を蓄え地域文化を支えていたことが伺い知れる。

岡谷今井の諸大名の休憩に利用された御小休本陣を始め、街道筋の要所には当時の茶屋が残っている。諏訪湖の眺望のすばらしい高木や、今でものんびりとした雰囲気に残る原の茶屋など、そこにたたずめば私たちが失ってしまったものに気づくような気がする。交通網の発達によって私たちは高速移動が可能になった。しかしそのことで土地の光を観る余裕がなくなってしまったのではないだろうか。

湯田坂の風景（昭和30年頃、下諏訪町立歴史民族資料館蔵）



とまる



鳶木宿のまちなみ／富士見町落合／江戸後期



鳶木宿の町屋／江戸後期



鳶木宿のまちなみ



鳶木宿のまちなみ／江戸後期



原の茶屋のまちなみ／富士見町富士見



原の茶屋のせがい造り



旧茶屋、桔梗屋／江戸時代



原の茶屋の本棟造り

とまる



金沢宿のまちなみ／茅野市金沢



金沢宿のまちなみ



金沢宿の馬宿／明治13年頃



茶屋、近江屋／江戸文久5年



旅籠、松坂屋／明治27年





下諏訪宿本陣問屋／下諏訪町横町／江戸時代



下諏訪宿の旅籠／下諏訪町横町／江戸末期



下諏訪宿の商家／下諏訪町木の下／大正初期



下諏訪宿の旅籠／下諏訪町立町／明治7年の大火後



高木の茶屋／下諏訪町南高木／江戸末期



とまる



今井の旧御小休本陣／岡谷市今井／江戸明和9年



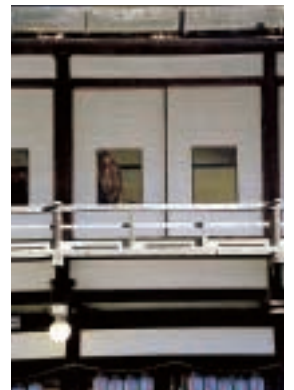
大手の3階建て旅館／諏訪市大手／昭和10年代



富浜町の3階建て旅館／諏訪市諏訪／昭和8年



神宮寺の茶屋／諏訪市中洲



穴山の旅館／茅野市玉川／現存しない



諏訪地方においては寒天産業や酒造りなど、この地域の風土の特性を有効に利用した地場産業が発展してきた。寒天工場と周囲の田圃に繰り広げられる寒天造りの光景はこの地域の冬の風物詩となっている。まちなかにあつては寒天倉庫や造り酒屋の店や酒蔵が豪壮な姿を見せている。明治期になると製糸業がこの地域にて岡谷を中心に大きく発展するが、このことがさらに味噌、醤油等の醸造業の発展を促した。

諏訪地方いたるところに見られた製糸業の工場、寄宿舍といった施設も戦時中より他産業の工場や寮などに転用されていき、今日の精密、電子産業発展のために貢献したと考えられるが、それらの産業の発展に伴い順次姿を消していった。かつて林立していた繭蔵も戦後になって寒天倉庫などに転用されていったが、5階、6階建の高層のものはほとんど姿を消してしまった。そのような中、いくつかの事務所棟が現在でも大切に使用されている。凝った洋館意匠の事務所が当時のこの地域の繁栄を偲ばせてくれる。

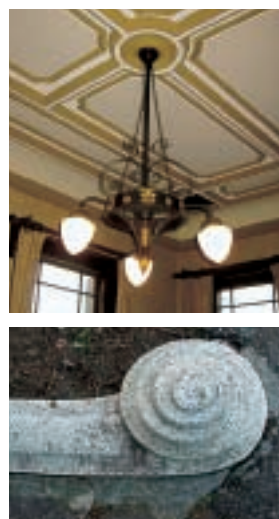
農村部では冬場の副業として穴倉と呼ばれる茅葺き掘立て小屋の中で繭細工などの作業をおこなった。この穴倉はかつて諏訪地域全体に分布していたが現在は茅野市泉野地区に残るのみとなっている。そこでは繭打ちのため、いまだに水車小屋も使われている。

生産施設はその用が失われれば取り壊される運命にあるが、今回取りあげられている建物は地場産業など古い建物が現役のまま使用されているものや、他産業に転用されるなどして使用され、時代の波に淘汰されることなく生き残ってきたものであり、地域の顔、シンボルといえるのではないだろうか。そして、取り壊された当時の工場等も、越屋根からの採光や換気など人間的な空間を持っており、現在残る倉庫や事務所に劣らず地域性にもつながるような存在感を持っていたように思う。

岡谷市製糸工場群（大正、岡谷市蚕糸博物館蔵）



つくる



旧ハ林組事務所／岡谷市中央町／大正7年／現信栄工業事務所



「片倉製糸王国」とまで呼ばれた片倉組の旧事務所で、木造でありながら石柱とレンガの外観はほぼ当時のままであり、国登録有形文化財に指定されている。内部のけやきの一枚板で作られた豪華な階段や、大きな金庫室なども当時の隆盛を偲ばせている。



旧片倉組事務所／岡谷市川岸上／明治43年／現中央印刷事務所

←旧ハ林組事務所は木造レンガ造りで、外観・内部ともあまり手が加えられておらず当時の姿を今に伝えている。昔の郵便局や銀行の窓口を思わせる受付窓口、手の込んだ階段やドア、応接室のシャンデリア、大会議室のしつこい飾り天井など貴重なものである。



→旧東英社事務所は、林組や片倉組事務所の石とレンガで造られた威圧するような外観と違い、まるで病院のようなやさしい雰囲気のある大正ロマンの漂う洋館建築である。

旧東英社事務所／諏訪市湖南／大正9年／現日東光学事務所

つくる



加茂町の製糸工場及び事務所／岡谷市加茂町／旧全宮坂製糸所



天竜町の製糸工場／岡谷市天竜町／旧笠原製糸／現存しない



加茂町の製糸工場／岡谷市加茂町／新增沢工業



御田町の製糸工場及び事務所／下諏訪町御田町／旧片倉組、現武藤工業

つくる



大門の繭倉庫及び事務所／下諏訪町大門／明治4年／下諏訪倉庫



5階建て繭倉庫／岡谷市銀座／明治26年／吉田館／現存しない



内部見上げ／小屋梁の上にだるまが置いてある



塚原の繭倉庫／茅野市ちの／現寒天倉庫



本町の繭倉庫／岡谷市本町／金上



金沢の繭倉庫／茅野市金沢／羽世見屋

つくる



島崎の味噌醤油工場／諏訪市高島／大正5年頃山梨より移築／宮坂醸造



飯島の醤油店／諏訪市四賀／明治3年／旧北沢醸造



中央町の味噌蔵／岡谷市中央町／サスキチ味噌



諏訪の味噌工場／諏訪市諏訪、湯の脇、湖岸通り／明治初期～昭和初期／タケヤ味噌

つくる



上町の造り酒屋／諏訪市諏訪／明治27年／舞姫酒造



元町の造り酒屋／諏訪市元町／宮坂醸造



上町の造り酒屋／諏訪市諏訪／明治初期／麗人酒造



桑原町の酒蔵／諏訪市諏訪／本金酒造



銀座の造り酒屋／岡谷市銀座／高橋酒造



本町の造り酒屋／岡谷市本町／豊島屋



神之原の酒蔵／茅野市玉川／大正初期／つじや酒造

つくる



宮川茅野の寒天工場／茅野市宮川／昭和34年山梨武川より移築
／金大商店



坂室の寒天工場／茅野市宮川



安国寺の旧寒天工場／茅野市宮川／大正10年頃／中村寒天／現機械工場



坂室の寒天工場／茅野市宮川／昭和25年住宅を改築
／伊藤寒天



横内の寒天工場／茅野市ちの／昭和20年代／松木寒天



宮川茅野の寒天倉庫／茅野市宮川／昭和20年頃に繭倉を移築／長野県寒天水産加工組合



坂室の寒天倉庫／茅野市宮川／昭和32年頃に田辺と塚原の繭倉を移築



宮川の寒天倉庫／茅野市宮川／大正後期に繭倉を移築



安国寺の寒天倉庫／茅野市宮川／昭和2年頃に岡谷の繭倉を移築



宮川茅野の寒天倉庫／茅野市宮川／繭倉を利用

つくる



かつて山浦地方に多く分布していた穴倉は農家の人達が晩秋、日当たりの良い場所を選んで深さ3尺程の方形の穴を掘り、そこに丸太を組み合わせて小屋をかけ、藁と土で屋根を葺いて造った冬季のみの共同の仕事小屋である。そこで副業の藁細工を作った。この地域の風土を研究した三沢勝衛氏によれば、冬季乾燥性の強いこの地方では藁の繊維に適度な湿度を持たせる為にも適した場であり、仮設性や融通性など最高最進の文化とも考えられるそうである。そこは様々な話題に花が咲く人々の交流、人生勉強の場でもあった。



下槻木の穴倉／茅野市泉野／昭和35年



穴倉内部



下槻木の水車／茅野市泉野／昭和初期／藁打ち車屋

つくる



北久保の集荷所／茅野市宮川／昭和20年代



旧諏訪精工舎事務所／諏訪市大和／昭和20年



矢木町の製材工場／下諏訪矢木西／昭和15年頃／若松

にぎやかな物売りの声、行き交い集う人々の笑顔と叫喚、やりとりされる品々、売り出しの旗、かつて「あきない」の場は活気で溢れていた。諏訪のどの町でも日本のどこでも駅前商店街は盛っていた。近くの人山浦の人々もおマチの上諏訪や岡谷にハイカラな気分ではるばるくり出したのだ。夜になっても人々は途切れることなく、オレンジ色の裸電球や提灯に浮かび上がる看板や商品を求めてやって来た。えびす講、盆暮れ、正月、歳時記とともに商店街はあった。しかしここ数十年のうちの圧倒的車社会の到来による郊外型大規模店舗の発展、さらに商圈の大変化は、駅前商店街に空洞化をもたらし「シャッター通り」の異名は当たり前になってしまった。そんなわびしい風の吹く商店街の建物にじっと目を凝らしてみよう。例えば上諏訪の本町や末広町の古い店のファサードをみると、なんと洒落てハイカラなデザインが多いことか。ルネサンス風あり、新古典主義あり、アールデコ風あり、まるで「キネマの天地」の舞台のように、また巨大な看板のように立ち上がり、各店ごと正面に独特な商いの顔を見せている。俗に「看板建築」と呼ばれ、木造の建物に洋風好みのお面を、銅版やモルタルなどのローコストな仕上げで被せた建物で、関東大震災後の東京復興期つまり大正の末から昭和初期に流行して諏訪にも及んだ。また商店街の中に垣間見える町家風の重厚な建物は江戸から明治初めの商家の名残りである。これらは元町や裏通りにさらにいくつか残っていて、かつて高島藩米問屋であり一時造り酒屋で現在すまいとなっている築三百年といわれる和泉屋とか、明治初めに造られ現在まで生業の表の商い場として見事に保存活用している染一染物店、さらに近傍には蔵造りの商家も残っている。諏訪大社秋宮近辺の下諏訪宿にも立町の芸者の置屋など風流な建物が残し、御田町の小料理屋の円形意匠窓からは宿場界隈の浮世小唄が流れる気がする。商いの栄華を刻んだ、これらの見事な建築遺産が諏訪の地域づくりの中でもう一度再生活用されることができないものだろうか。人々の笑顔がゆき交うあの賑わい通りの再度の復活を夢見て。

上町の丸柳大津屋の中学野球速報盤に見入る人々（昭和8年、諏訪市博物館蔵）



あきなう



清水の染物屋／諏訪市清水／明治9年／180年位前に創業／染一染物店



高島藩の米問屋／諏訪市諏訪／江戸中期（300年以上前）／和泉屋



桑原町の菓子屋／諏訪市諏訪／昭和10年



桑原町の醸造店／諏訪市諏訪



桑原町の醸造店／諏訪市諏訪

あきなう



清水の呉服屋／諏訪市清水／明治



銀座の陶器店／岡谷市銀座



本町の洋品店／茅野市本町／明治末期



桑原町の商店／諏訪市諏訪



末広の料理屋／諏訪市諏訪



宮川茅野の料亭／茅野市宮川／明治初期



立町の芸者の置屋／下諏訪町立町



大手見番／諏訪市大手／旧歯科医院



御田町の小料理屋／下諏訪町御田町下

あきなう



本町の洋品店／諏訪市諏訪／大正14年



本町の貴金属店／諏訪市諏訪／昭和元年の大火後



本町の薬屋／諏訪市諏訪／昭和初期



本町の八百屋／諏訪市諏訪／昭和元年の大火後



本町の雑貨店とミシン店／諏訪市諏訪／昭和元年の大火後



本町の洋品店と金物店／諏訪市諏訪



末広の呉服店／諏訪市末広／昭和初期



本町の理髪店／諏訪市諏訪／大正13年



本町の靴店／諏訪市諏訪／昭和初期



本町の時計店／諏訪市諏訪／明治後期



桑原町の紙商／諏訪市諏訪



清水の八百屋／諏訪市清水／昭和7年



本町の薬屋／茅野市本町／明治初期

あきなう



桑原町の茶店／諏訪市諏訪／昭和10年



上町の金物店／諏訪市諏訪／昭和12年頃



仲町の事務所／諏訪市諏訪／昭和初期
／信州諏訪味噌工業共同組合



仲町の寒天商店／茅野市ちの／明治45年、大正11年



菅野町の商店／下諏訪町菅野町／昭和27年



穴山の商店／茅野市玉川／大正



本町の写真館／茅野市本町／大正9年



瀬沢の商家／富士見町落合

八ヶ岳山麓を山浦地方という。ここはせいろ倉が多く分布する地域である。せいろ倉はセイロウ、落とし板倉はオトシと呼ばれ、セイロウが古くオトシは新しいものである。さらには「尺八」と呼ぶ構造のものも極めて稀にある。井籠倉から落とし板倉へと変遷した板倉も、土で塗られて土蔵へと変わった。

今日見られる一般的な落とし板方式の倉は柱に溝を掘り、その溝に厚さ1寸5分から2寸の板を上から落とし込んで壁にした。部材は地場産のカラムツまたはツガを用いた。その壁に木のくさびを打ち、そのくさびからわら縄をたらして、赤土の壁を塗った。赤土は屋根裏となる部分まで塗りくるめ、屋根はその上に載せ白樺の皮や栗の板で屋根を葺いた。やがて平石（鉄平石）へ、そして今では瓦葺、鉄板葺きへと変化している。

赤土が乾くと中塗りをして白壁の上塗りを施し完成した。妻壁の棟木の小口部分を「うしばな」といい、丸のなかに水、龍、大黒、恵比須、あるいは家紋などの装飾を施した。

階下には壁に沿って分庫を造った。分庫は板で仕切り、正面は板を落として粉を入れた。階下には穀物のほか、普段使用しない陶器や漆器、日用品などを入れ、二階は衣類、布団類などを入れた。また軒下部分を「だし」と言う。

味噌倉は多くの場合土蔵に併設されており、やはり厚板を用いた落としに土壁を塗り、面積は一坪から一坪半くらいである。

山浦地方では、土蔵はその屋敷の東南に設けるものだとされているが、「建てぐるみ」の倉は、冬の寒い風を防ぐためか母屋の西北の隅に設けている。

万一、村で大火があり、焼けてしまっても蔵は家財を守った。飢餓に備え、米を大切に保管するためにも、蔵の重要性がますます増したので、今でもたくさんの蔵が残っている。この他、別の章にも取り上げたように、使用目的によって多様な蔵があり、諏訪の産業と地方性があって興味深い。

また北山浦と言われているあたりには、干し草を蓄えた、萩屋（はんや）と言う小屋を見ることができる。

塚間の諏訪倉庫（昭和55年、岡谷市蚕糸博物館蔵）



おさめる



北大塩の土蔵／茅野市米沢／明治12～13年



高木の土蔵／下諏訪町高木／明治初期



東町の土蔵／下諏訪町東町



神之原の土蔵／茅野市玉川／明治初期



柳沢の土蔵／原村柳沢



柏木の土蔵／原村柏木



弘沢の土蔵／原村弘沢



南大塩の土蔵／茅野市豊平／大正末期頃



机の土蔵／富士見町落合／昭和初期

おさめる



萩倉の土蔵／下諏訪町萩倉／明治初期



飯島の土蔵／諏訪市四賀／昭和11年



元町の土蔵／諏訪市元町





ハッ手の土蔵／原村ハッ手



穴山の土蔵／茅野市玉川／昭和初期



須栗平の土蔵／茅野市湖東



下浜の土蔵／岡谷市湖畔



糸萱の土蔵／茅野市北山／昭和25年頃移築



安国寺の寒天倉／茅野市宮川／大正10年



大和の土蔵／諏訪市大和



湯の脇の土蔵／諏訪市湯の脇／大正9年

おさめる



南大塩の土蔵／茅野市豊平／江戸後期



御作田の土蔵／茅野市豊平／江戸後期



御作田の土蔵／茅野市豊平／昭和30年頃下諏訪より移築



新井の土蔵／茅野市湖東／大正



北真志野の馬屋（味噌蔵）／諏訪市湖南／江戸時代



下金子の土蔵／諏訪市中洲



中沢の長屋門型土蔵／茅野市玉川／明治



坂室の二連蔵／茅野市宮川



土壁で塗り込められた
便所を雪隠蔵とよぶ。

中沢の雪隠蔵／茅野市玉川／明治前期



諏訪の洋風土蔵／諏訪市諏訪



小川の旧天然ガス倉庫／諏訪市豊田



おさめる



芹ヶ沢のせいろ蔵／茅野市北山／昭和54年に上諏訪より移築



湯川のせいろ蔵／茅野市北山／明治38年の大火に残った

八ヶ岳山麓に多く見られるセイロウは中継ぎに柱が立ち、短い部材で井籠を組むことができる。この地域で多く産するカラマツまたはツガで、せいは4寸～8寸で、厚さは2寸5分～3寸、出隅の仕口は蟻落として、厚みの薄い部材で組まれている。



蟻落し平組



蟻落し互組



糸萱のおとし蔵／茅野市北山／明治



神戸のおとし蔵／富士見町富士見



糸萱のおとし蔵／茅野市北山



板倉の屋根下には後から塗るのは大変なので、屋根をのせる前に壁土を塗っておく。経済的理由などで板倉のままで終わっているものも少なくない。

この地方では「尺八」と呼ぶ構造の倉が極めて稀にある。それは貫の上下に「尺八竹」を通し外側の下地を止めた構造で、外側の小舞を受けるため柱に刎掛刻みが入るが、写真で確認することができる。



尺八蔵



おさめる



北大塩の萩屋／茅野市米沢



菅沢の萩屋／茅野市上菅沢



湯川の萩屋／茅野市北山



柏原の萩屋／茅野市北山



上古田の萩屋／茅野市上古田／明治後期



中新田の馬舎／原村中新田／昭和戦後



立沢の馬舎／富士見町本郷

諏訪地方でも江戸時代旅芸人を招いた芝居や、またそれに教えられた若者たちの習芝居の興行も村祭りの余興としてたくさん行われた。そのための舞台または舞屋と呼ばれる建物が、鎮守社の境内に沢山できた。

村芝居停止などの廻状が多く出されたにもかかわらず、天保年代に多くの大きな舞屋が造られた。すでに出語りや廻り舞台など立派な設備を持つものもあり、村人はその前面の芝生の上で見学した。また、古い民衆信仰の一つに観音信仰があり、観音様に帰依する、霊場の巡礼を行った。諏訪には「諏訪百番霊場」があって、札所巡りが早くから存在した。

諏訪の七年に一度申寅年の御柱祭は、全国にも例を見ないという一郡挙げての大祭で、まつりへの奉仕は怠らず、村に何かの幸不幸が起こればこぞって上社、下社に参詣祈願を常とするなど、諏訪社への思いは深い。本誌では扱っていないが、神社仏閣など名建築が多くあり、住民の拠り所となっている。これらの建物の多くは名工の大隈流、立川流により造られている。

古来より下諏訪は湯の町と呼ばれ温泉で知られていたし、上諏訪にも湯がいくつもあった。近代に入り上諏訪には片倉館が建設された。戦前、製糸王片倉兼太郎が片倉組創立50周年の記念事業として建設した会社の福利施設（クアハウス）であるが、片倉製糸従業員ばかりでなく一般の人々も利用できたので観光客をはじめ農閑期の骨休みに農村の老若男女で賑わった。

各地の古い役場等の公共建築の多くは洋風化が進み、いずれも同じような木造下見板張りペンキ塗りで作られている。これらの建築物は時代の変化と諸制度の改革に伴い建設された。現在公民館（集会場）として使用されているが徐々に建て替えられその姿を消しつつある。

塩沢の塩壺温泉（明治、五味和男氏蔵）



つどう



片倉館／諏訪市湖岸通り／昭和3年／設計 森山松之助



つどう



塩沢瀬神社の舞台／茅野市米沢／江戸天保13年



塩沢の舞台は村のうぶすな神である瀬神社境内にあり、かつては若者らが村芝居を演じた。大隈流伊藤安兵衛の作で、桁行四間、梁行六間、切妻造りで後方の中央二間を遠見とする。



田沢稲荷の舞台／茅野市宮川／江戸天保11年
／両脇に浄瑠璃語りの小部屋



有賀千鹿頭神社の舞屋／諏訪市豊田



下槻木の舞台／茅野市泉野／江戸文久2年



中新田津島社の回り舞台／原村中新田
／江戸弘化5年



柳沢の舞台（現公民館）／原村柳沢



葛窪の舞屋／富士見町境



今井十五社のくぐり舞屋／岡谷市神明町／江戸享保元年



北大塩宝勝寺の舞台／茅野市米沢



普門寺足長神社の舞屋／諏訪市四賀
／江戸文久2年



坂室の舞台／茅野市宮川



高木津島神社の舞屋／下諏訪町
／江戸天保4年

つどう



木之間の観音堂／富士見町富士見／江戸天文14年



木之間のお堂／富士見町富士見



若宮八幡社／富士見町富士見



弘沢の薬師堂／原村弘沢／江戸時代



乙事の十一面観音堂／富士見町本郷／江戸天明3年
／大工 小池佐兵衛、彫刻 大隈流伊藤長左衛門



高森の観音堂／富士見町境



葛窪のボロ機織り集会所／富士見町境／旧薬師堂



中屋公民館／岡谷市長地／昭和27年医院を移築



普門寺公会所／諏訪市四賀／大正10年



須栗平公会所／茅野市湖東／昭和初期



大池公民館／茅野市金沢



小六下組公会堂／富士見町境

つどう



乙事の青年会場／富士見町本郷／昭和26年に下社本殿の雨屋を移築／旧青年団道場



平温泉（共同浴場）／諏訪市小和田／大正初期



穴山の念仏堂と馬頭観音／茅野市玉川

この章のたった3ページに載せるだけの学校建築を探したのだが、残念ながら足りなかった。この本の趣旨から外れるが、やむを得ずすでに解体されている建物を3件載せている。又、現存するが1年後には取り壊されることが決定している高島小学校の講堂もある。

現存している建物は、多くの人がノスタルジックに思い描くであろう下見板の学校である。富士見南中学校は昭和33年竣工でまだ50年は経っていないが、現役で活躍する木造校舎としては南信地方で最も古いそうである。萩倉の分校には、ここに製糸工場が林立していた頃に女工達を通ったのであろうか。湖東小学校は昔の玄関部分だけが保存されている。小六の分教場は現在の分校に当たるのであろうが、ほぼ民家の形態をしている。

掲載のすでに解体された建物は、いずれもモダンな洋風建築である。諏訪蚕糸学校（旧平野農蚕学校・現岡谷工業高等学校）は製糸業が栄えた時代を思わせる建物である。この諏訪蚕糸学校の女子部が独立して出来た岡谷東高等学校も、どこか似た雰囲気 of 建物である。諏訪二葉高等学校は諏訪高等女学校として明治41年に誕生し、写真の建物は昭和8年に竣工した。昭和4年のアメリカ経済恐慌以後製糸業は衰退していくのだが、まだ余力があったのであろう。当時としては珍しい鉄筋コンクリートの建物であった。

解体が決まっている高島小学校の講堂は、当時3千人を超える児童生徒を収容すべく、諏訪二葉高等学校が竣工した昭和8年に着工し翌年に竣工している。当時としては画期的な鉄骨と木造を組み合わせた構造に、上諏訪町工匠組合が取り組み、現在でも狂いもなく悠然と諏訪湖を見下ろしている。この講堂は特に音響効果が良く、現在でも音楽会は講堂で行われている。解体されることが本当に残念である。学校建築に限らず、このような貴重な建物を保存する方法を考える必要がある。

諏訪湖をのぞむ高島小学校（昭和10年頃、諏訪市博物館蔵）



まなぶ



高島小学校講堂／諏訪市諏訪／昭和9年



諏訪二葉高校／諏訪市岡村／昭和8年／現存しない



岡谷工業高校／岡谷市今井／現存しない



岡谷東高校／岡谷市南宮／現存しない



富士見南中学校／富士見町境／昭和33年



萩倉の分教場／下諏訪町萩倉／大正元年

まなぶ



旧湖東小学校玄関／茅野市湖東／明治45年／昭和57年に玄関を移築



小六の分教場／富士見町境

「風立ちぬ、いざ生きめやも」この言葉は、かつて信州の爽涼な高原の肺結核の療養の場にて、不治の病だからこそ生きたいという希望のうちに生まれ、悲しくも美しい愛が語られた「癒しの舞台」を思い起こさせる。堀辰雄も昭和6年と10年に、富士見高原療養所にて院長かつ文人である正木不如丘を慕って療養滞在し、悲しい愛のドラマ「風立ちぬ」などを著した。この「癒しの舞台」には「宵待ち草」の竹久夢二、「月よりの使者」の久米正雄、など多くの文化人が登場した。人は病に侵されて「癒しの舞台」の門をくぐる時、その向こうの、健康な日常とは異なる世界に入っていく。仮に不治の病ならば、その生と死の境界である門をくぐるのは絶望に希望を縫い込むようなものなのだろうか。近代医療施設はそんな光と影の境界となるべく壮麗さと風格さをもって建てられたのかもしれない。諏訪地方でも、青木医院のように入母屋の立派な和風屋根が洋館に載った擬洋風建築、翠川医院や北原医院のようにルネサンス風の館に立派なポーチが付くもの、また上諏訪病院のように武家風の門の向うに蔦の絡まるルネサンス風本館が威厳をみせるもの、他に腰折れ屋根、張出し窓などの特色ある医院も現存する。みな「癒しの舞台」としての重厚さを持ち、かつ近代医療施設としての機能的合理性をも併せ持っている。在りし日の岡谷病院の姿は、そんな近代日本の医療施設が背負った宿命を今に伝えてくれた。今、富士見高原病院の白いRC造の奥にひっそりと佇む木造二階の一棟はかつて富士病棟といって今は「風立ちぬ」の語り部となっている。かつて堀辰雄が「鳥が翼を広げたようだ」と記したように、中央を一本の廊下が貫き、陽光と風を求めるようなテラスを備えた何棟もの木造病棟が平行配置で接続していく高原の療養所らしい姿がそこにはあった。院長の正木不如丘は、在欧中に視たスイスなどのサナトリウムを目差したのかもしれない。それは絶望の淵にもかかわらず、いやそれが故にこそ美しい愛が語られる、むしろ希望への光を待ち望む明るい癒しの舞台、つまり新時代の医療施設として、生から死ではなく、生から生へと力強く患者を迎えてくれる現代の医療施設への先駆けだったとも思えてくるのだ。

旧岡谷病院（明治、岡谷市蚕糸博物館蔵）



いやす



この富士病棟は大正15年に地元の有志によって(株)富士見高原療養所が誕生し、最初に建設された病棟である。昭和3年に初代院長として正木俊二（雅号不如丘）の下で個人経営の「日光療養所」として再発足し、結核患者を収容した。日本で唯一の高地療養所は、涼しく恵まれた自然の中で、多くの文化人、有名人が入院した。

旧富士見高原療養所 富士病棟／富士見落合／大正15年／現富士見高原病院



並木通りの病院／諏訪市大手／大正10年／上諏訪病院



並木通りの医院／諏訪市大手／大正11年／青木医院



湖柳の医院／諏訪市湖岸通り／昭和初期／北原医院



本町の医院／岡谷市本町／昭和4年



高島の病院／諏訪市高島／旧茅野病院

いやす



中央町の医院／岡谷市中央町／昭和6年／翠川医院



塚原の医院／茅野市塚原／旧竹内医院



中央通りの医院／下諏訪町中央通り／現存しない



天竜町の医院／岡谷市天竜町／旧笠原医院

明治政府が誕生すると、近代社会への整備普及が急速に始まった。諏訪郡では数十の村が合併を繰り返し、今日の6市町村が制定された。その行政の中心として役場がある。境村役場は、明治以来の擬洋風造りであるが、大正に建てられた下諏訪、茅野の役場は、ルネッサンス風の欧風デザインの外観になった。同年代に建てられ、共に現存していない両役場のデザインが、非常に類似していることがわかったことは面白い発見だった。昭和恐慌の最中に建てられた岡谷市役所は、スクラッチタイルなどを使用したプレモダンなデザインになっている。日本の輸出産業を担った蚕糸の隆盛の時代を伝えているようだ。

郵政事業は発足当時民間に委託し、その後国営化された。当初は地域の名家などが文明開化のリーダーとして民家を提供して運営したが、その後は、当時流行したお洒落なデザインの郵便局に建て変えられていった。

地域防災の消防組織は、町の火消しを警察の管轄下に置いたものが、その後独立し消防団となった。地域の男子の誇りとして引き継がれ、詰襟の軍服風ではない、法被の制服で活躍している。地域住民の寄付、負担金により法被の精神でポンプ小屋、屯所が建てられた。

地方での金融機関は、民衆の弱者救済のための無尽だったようだ。明治になり、宮川銀行などの小さな銀行が急増したが、早々に統廃合された。大正に建設された旧安田銀行の、古代ギリシャ、ローマ風の威容な外観に比べると、庶民的な建築に見える。

明治以前の施設に穀留番所がある。凶作の時に、役人が庄屋などに命じて、主要穀物の流通を監視させたものだが、飢饉により生死を懸けた農民の為、厳格に行ったと想像する。その家人の尽力により、十数ヶ所あった番所の内、一軒だけが現存し、不安定だった農耕の歴史を伝えている。

発刊にあたり“おおやけ”というテーマで、公共的建築物を探したが、取材物件がほとんどなかった。戦後の高度成長から今日に至っては、豊富な予算で多くの公共建築が造られているが、戦前は軍事政策で余裕などなく、あまり進まなかったのだろう。今回、取材できたどの建物にも、当時の欧米組織に追いつくため、欧風デザインを和の技術により模索した面影があり、当時の建築技術者が新しい時代の地域発展に尽くそうとした願いが感じられた。

旧中洲村役場（諏訪市博物館蔵）



おおやけ



旧岡谷市役所／岡谷市幸町／昭和11年



旧下諏訪町役場／下諏訪町上久保／大正13年／現存しない



旧永明村役場／茅野市ちの／大正15年／現存しない



旧境村役場／富士見町境／現境公民館



旧蓼科郵便局／茅野市北山／昭和11年



旧安田銀行／諏訪市諏訪／大正頃



旧宮川銀行／茅野市宮川／明治15年



旧今井穀留番所／岡谷市今井／江戸元治元年

おおやけ



大日影の屯所／茅野市豊平／明治後期



大沢のポンプ置場／茅野市金沢



大池の屯所／茅野市金沢



須栗平のポンプ置場／茅野市湖東



鋳物師屋の屯所／茅野市米沢／昭和25年頃



上古田のポンプ置場／茅野市豊平

諏訪地方は諏訪湖を核とした盆地と八ヶ岳山麓の地域に大きく分けることができる。その景観と環境を構成する重要な要素として、山と水と道がある。どちらを向いてもすぐそこにある山は、一年の間に様々な色に変化しながら、青い空とともにすばらしい背景をつくり上げる。諏訪地方は晴れの日が多い。山から湧いた水は小さな流れとなり、やがて川となって諏訪湖に集まる。八ヶ岳山麓には、自然が造った川のほかに、江戸時代に坂本養川によって造られたセギ（農業用水路）がいくつもあり、現在も現役である。川やセギは小さな水路に分かれ田畑に水を供給する。住宅地にあつては水路のほかに用悪水路があり、昔から上水と下水を使い分けていたことが分かる。光のゆれる湖面やせせらぎの音は、環境を豊かにしている。山の中腹にある鎌倉街道、それより少し下にある甲州道中と中山道（旧道）、そのさらに下の新道（国道等）と諏訪湖が徐々に小さく、低くなってきたため、時代ごとの道が現在も残っている。それらの道を生活のための小路や路地が結ぶ。小路や路地には現在でも生活の中で使われている名があり、その名は歴史を感じさせるものが多い。

これら自然や歴史がつくり上げた要素だけですばらしい景観が形成されているのだが、そこにある建物などによって更にすばらしくなっている場合と、そうではない場合がある。後者のほうが多くなってしまったが、掲載の写真は、大勢の人がそれぞれ気に入った場所を探した。一人だけの趣味のものではないのだが、共通点が多いことに気がつく。よく手入れされた生垣や板塀、軒先の高さで刈り込まれた防風垣、苔の生えた石垣などは、言うまでも無く背景の山並みによく合う。建物などの色は、色相というより素材が持つ色合いであり、それは紫外線や風雨に曝され、見事に背景と同化している。連続する家並みは、不規則でありながら整然としている。仕上げの材料や色が同じであることもあるが、その地域の歴史や環境が育んできた屋根の勾配や軒の高さ、蔵の配置などが揃っているからなのだろう。景観や環境を壊すことは容易であるが、つくり上げるには時間と努力が必要であることを忘れてはならない。

諏訪湖畔風景（昭和初期、諏訪市博物館蔵）



ちまた



弘沢の薬師堂・によ／原村弘沢



羽場の生垣／富士見町本郷



弘沢の生垣／原村弘沢



机の数寄木堀／富士見町落合



旧中央線鉄橋／富士見町落合



大久保の防風垣／原村大久保



柳沢の防風垣／原村柳沢



柳沢の防風垣／原村柳沢／右はせいろ蔵、左は落とし蔵



中新田の防風垣／原村中新田



山田の防風垣／茅野市玉川

ちまた



須栗平の植木／茅野市湖東



湯川の植木／茅野市北山



中道の生垣／茅野市泉野



上原、旧城下町の小路／茅野市ちの



塚原の石垣／茅野市ちの



新井の蔵通り／茅野市宮川



糸萱の蔵通り／茅野市北山



安国寺の石垣／茅野市宮川



北大塩、本棟造りの家並み／茅野市米沢



茅野駅跨線橋／茅野市ちの／明治末

ちまた



中金子の通り／諏訪市中洲



元町の路地／諏訪市元町



小和田の路地／諏訪市小和田



桑原町の亀屋小路／諏訪市諏訪



桑原町の通り／諏訪市諏訪



下諏訪宿のまちなみ／下諏訪町立町／建築住民協定が結ばれている



中山道のまちなみ／下諏訪町東町下



仲町の生垣／下諏訪町仲町



立町の路地／下諏訪町立町



湯田町のまちなみ／下諏訪町湯田町



水月公園の配水池／下諏訪町東町中

ちまた



東堀、中山道沿いの生垣／岡谷市長地



東堀、中山道沿いの生垣／岡谷市長地



中山道、伊那街道の標石／岡谷市長地／右中山道、左いなみち



湊の通り／岡谷市湊



東堀の路地／岡谷市長地

全国各地で鰻絵（こてえ）を見ることが出来るが、諏訪地方でも左官の職人芸によって作られた土蔵の鰻絵が数多く残されている。この技術は静岡県松崎に生まれた江戸末期の天才左官、入江長八、通称「伊豆の長八」によって作られたのが起源だと言われている。鰻絵は、土蔵のシックイ壁に鰻で浮彫りをし、さらにその上に色シックイを重ね、彩色して絵画的に表現したものである。

土蔵の妻壁に家紋を浮彫りしたものは各地で見られるが、もっと装飾的、絵画的に様々な絵柄が見られる。「水」の文字や絵は火除けの願いを込められている。「龍」も水神であって火災から土蔵を守ってくれる。大黒や恵比寿は五穀や金銀が蔵に蓄えられる事を願い、「ねずみ」や「うさぎ」は子孫繁栄を祈って作られている。さらに、縁起物の「鶴・亀」「鯉の滝登り」や、昔話の「桃太郎」まで、多種多様の絵柄のものがある。いずれも見事で、ときにはユーモラスで、まことに魅力的である。

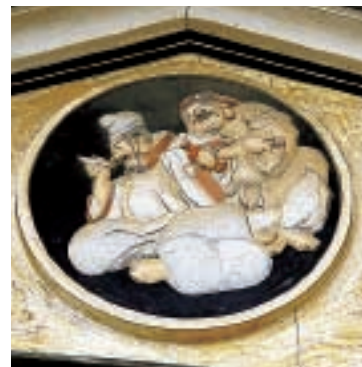
諏訪地方の昔の屋根には、瓦がほとんど使われていない。良質の陶土に恵まれなかったことと、諏訪地方の寒さに昔の瓦が耐えられなかったことによるのだろう。茅葺材料は豊富に得られ茅葺きの建物も数多くあったが、特別珍しいというものではなかった。茅葺き屋根以外は、「石置き屋根」がほとんどであった。石置き屋根には「かんば石葺」と「長板葺」がある。かんば石葺は白樺の皮を敷き並べその散逸を防ぐため屋根全面に河原石を敷き詰める葺き方で、非常に珍しい。一方、長板葺は栗の割板を大和重ねしその上に棧木を置き重石で押さえる葺き方で、これは他の地方でもよく見られる。この長板葺きの棧木と重石の変わりに平石（鉄平石）を割板数列おきに葺いたものが「葺き込み屋根」で、その後現れた全面を平石で葺く「石葺き屋根」と共に、鉄平石の主産地であった八ヶ岳周辺独特の屋根である。

これら石を使った屋根の軒先とけらばに取り付けられた堰板（せきいた）は、文字通り雨雪や石のずれ落ちを堰き止めたもので、諏訪地方では主に唐松で作られた。雪止めとしては、現在においても他の方法より勝っていると思う。デザイン的にも堰板は、けらばのラインを強く引き締め、棟で交差する部分が進化して「雀おどり（雀おどし）」となった。雀おどりは、堰板を延ばしただけの神社の千木にも似た「サス又」、腐り易いサス又の小口に笠木を乗せて出来た菱型を様々な組子で飾った「菱飾り（冠型）」、越後系で本棟造りによく見られる「山型」の三種類がある。いずれも様々な凝ったデザインがあり興味深い。

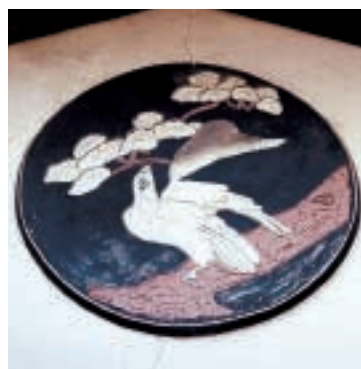
石置き屋根と葺き込み屋根の風景・長持行列（昭和初期、下諏訪町歴史民俗資料館蔵）



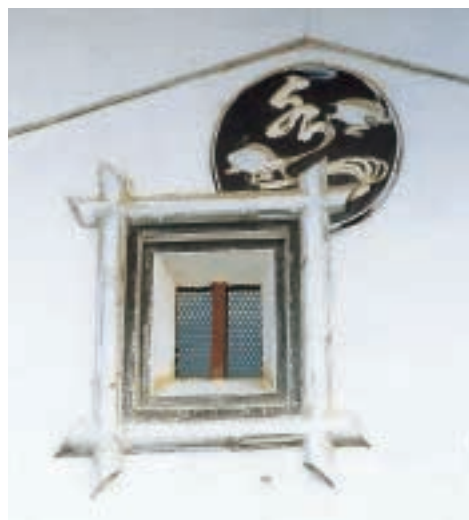
まとめる



丑鼻の饅絵／棟木の小口を丑鼻と言い、その外側に描かれた饅絵である



まとめる



窓廻りの饅絵



妻壁・桁の鰻絵

まとめる



丑梁・だしの鰻絵



丑梁・だしの鰻絵

まどめる



かんば石葺き屋根／現在、石の下はトタンに変わっている

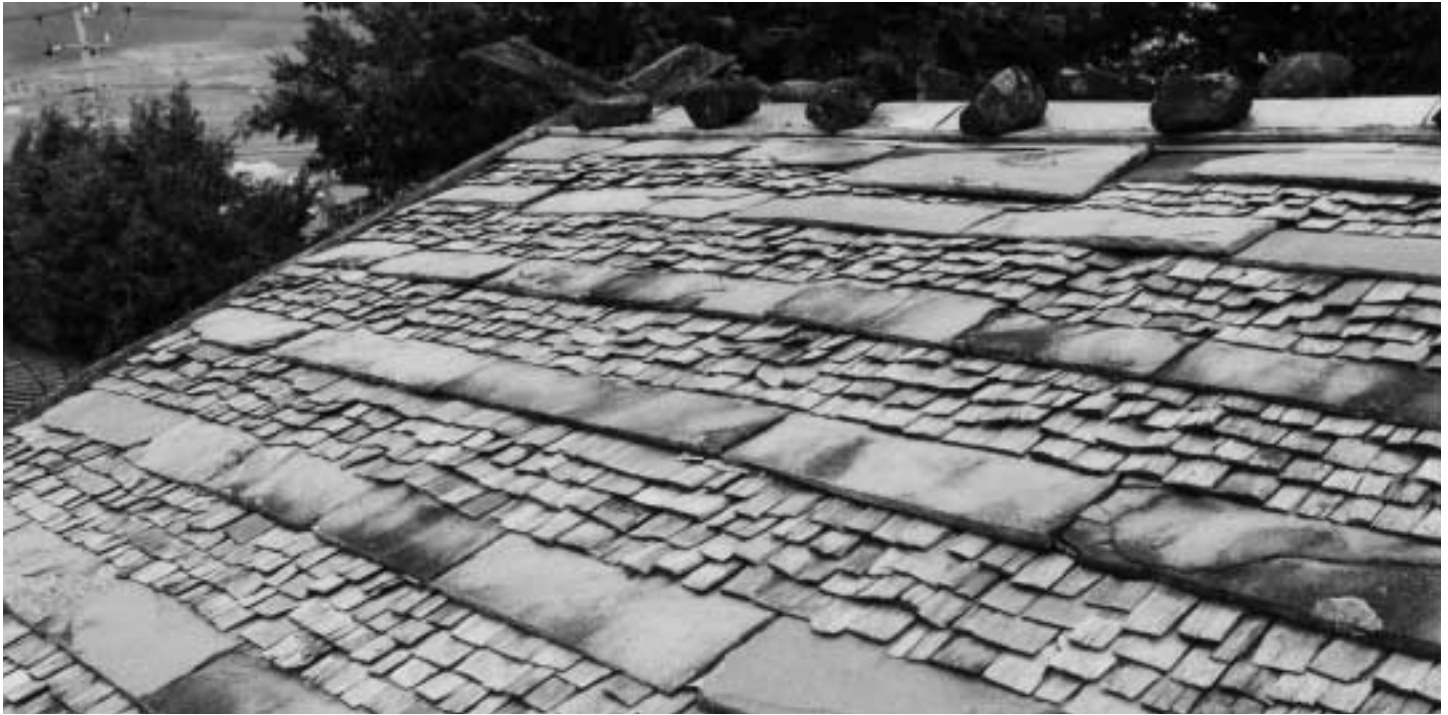
石置き屋根は栗、唐松、榎などの屋根板（長板）を河原石で押さえたものが一般的であるが、樺皮（かんば）葺きは白樺や、岳樺、桜などの樹脂の多い樹木の皮を敷き詰め、その上に河原石や鉄平石などを屋根一面に敷き詰め押さえとしたもので、防火性を持つ屋根として倉や建てぐるみの家などに用いられた。



長板葺き屋根／現在、石の下は波トタン葺き



長板葺き屋根／現在、石の下はトタン葺き



江戸時代後期より置き石などに使われてきた鉄平石を板葺きの中に葺き込む方法は明治初期より使われ始めたようである。石置き屋根は棧の所にごみが溜まって屋根板を痛めやすかったのに対し、葺き込み屋根はそのようなことはなく見た目もすっきりしている。板は定期的、この例では3年ごとに上下、表裏を返して葺き変える。明治前期には葺き込みに続いて屋根すべてを鉄平石で葺いた鉄平石葺き（平石葺き）も現れる。



まどめる



平石葺き（菱葺）屋根の倉



平石葺き（菱葺・平葺）屋根の倉／切妻屋根の2面が菱葺と平葺



平石葺き（菱葺）屋根の倉と物置



平石葺き（菱葺・平葺）屋根の倉と物置



平石葺き（菱葺）屋根の住宅／入母屋

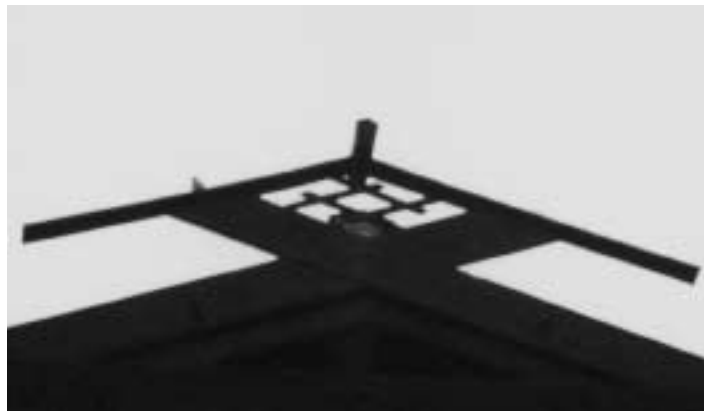
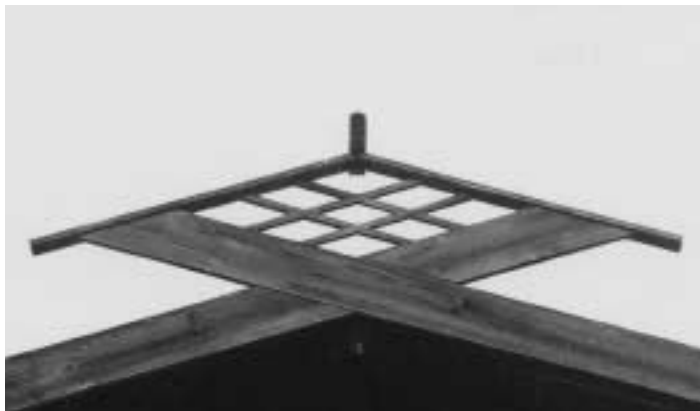


平石葺き（菱葺）屋根の倉

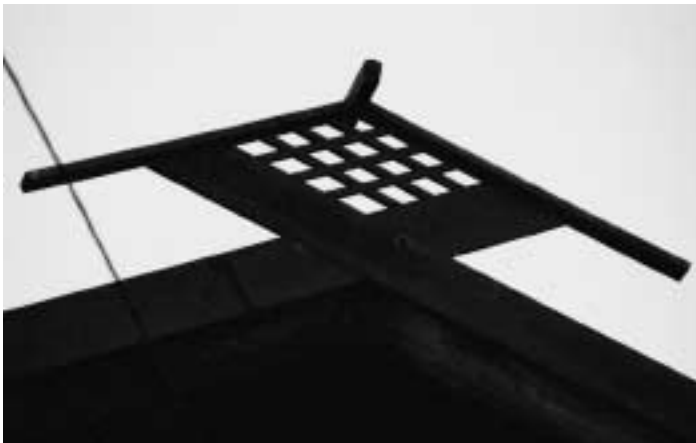
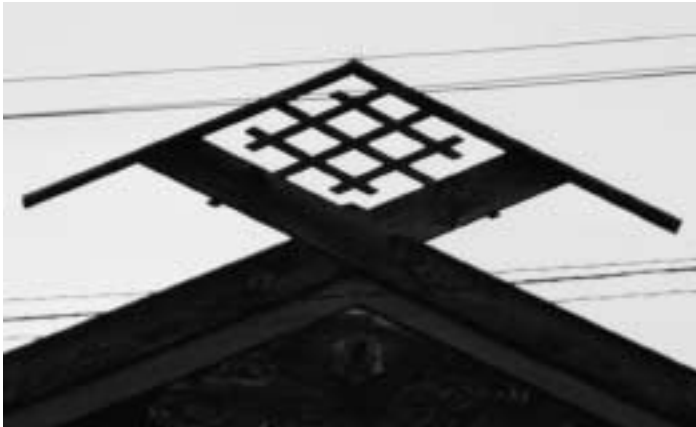


平石葺き（菱葺）屋根の住宅／寄棟

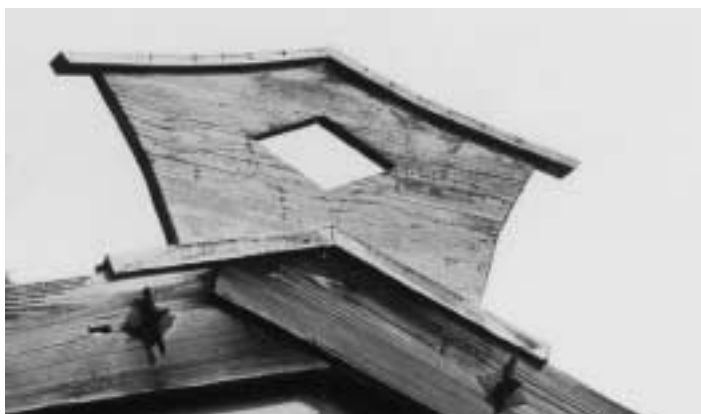
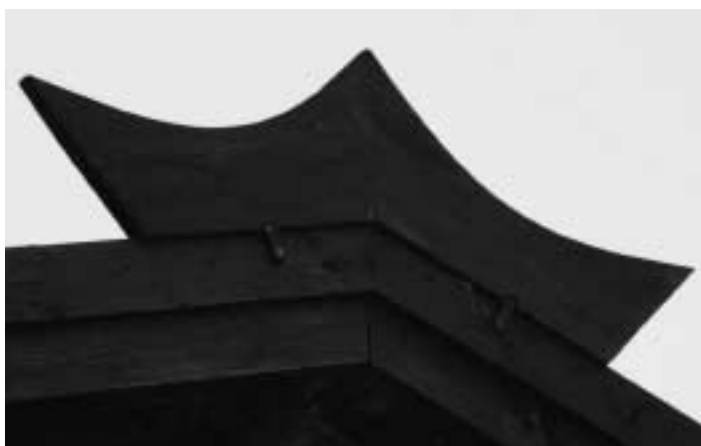
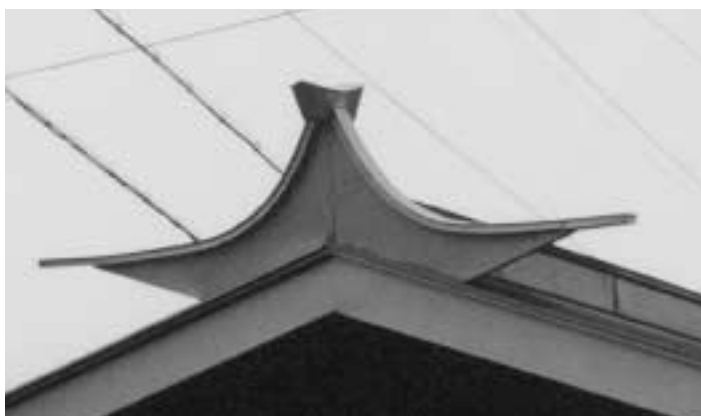
まとめる



様々な菱飾り



まどめる

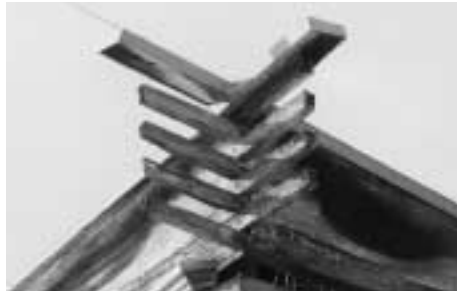
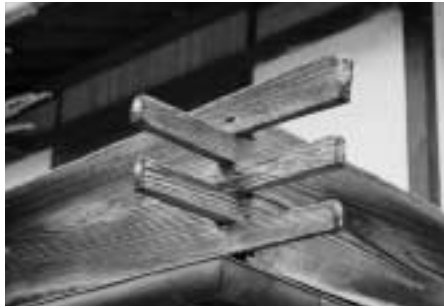


越後系の雀踊り



サス又は「入」に交差させるのが普通であり、右上の写真は特徴的であったので載せてある。
この中に「人」に交差したものが2つある。

まとめる



井籠組／せき板どうしの出隅納まり



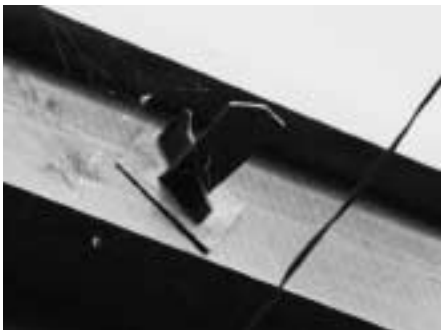
せき板と飾り破風板の納まり／せき板が柄（ほぞ）になっている一般的な例



せき板と飾り破風板の納まり
飾り破風板が柄（ほぞ）になっている特殊な例



せき板の継手



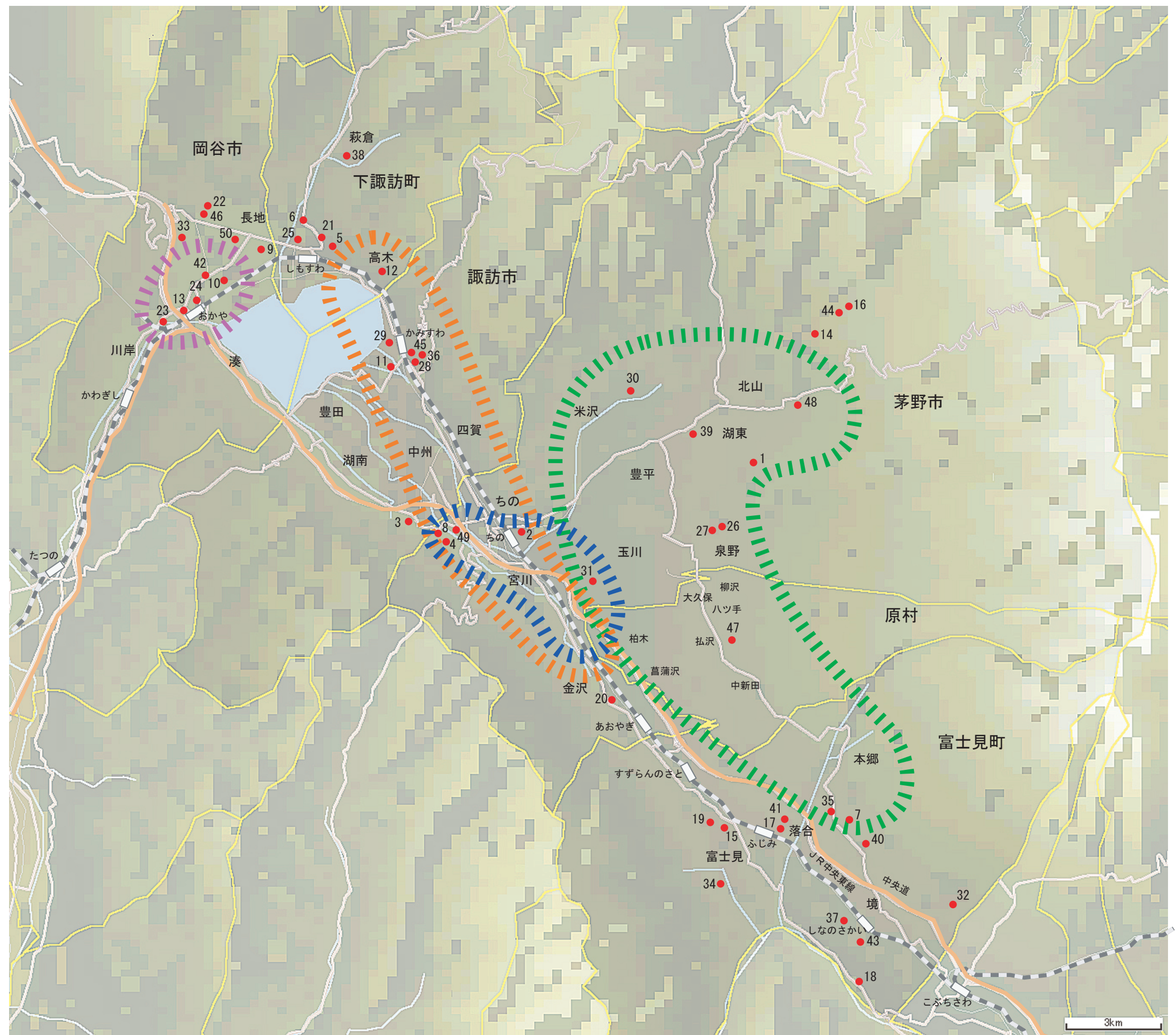
せき板金物の使用例／中段右端のものが原型と思われる



せき板金物／左から改良型カンザシ、新式イナズマ、古式コズナ

- 山浦地方（せがい造り、せいの蔵、こて絵、防風垣）
- 建てぐるみ
- 製糸家の家
- 寒天工場

- | | | | |
|----|----------|----|-------------|
| 1 | 尖石遺跡 | 26 | 下槻木の穴倉 |
| 2 | 白岩観音堂 | 27 | 下槻木の水車 |
| 3 | 上社本宮 | 28 | 看板建築群 |
| 4 | 上社前宮 | 29 | 片倉館 |
| 5 | 下社秋宮 | 30 | 塩沢瀬神社の舞台 |
| 6 | 下社春宮 | 31 | 田沢稻荷の舞台 |
| 7 | 乙事諏訪神社 | 32 | 葛窪の舞屋 |
| 8 | 神長官守矢史料館 | 33 | 今井十五社のくぐり舞屋 |
| 9 | 旧渡辺家住宅 | 34 | 木の間の観音堂・お堂 |
| 10 | 武井武雄生家 | 35 | 乙事の十一面観音堂 |
| 11 | 志賀邸 | 36 | 高島小学校 |
| 12 | 島木赤彦の家 | 37 | 富士見南中学校 |
| 13 | 旧林家住宅 | 38 | 荻倉の分教場 |
| 14 | トヨタ記念館 | 39 | 湖東小学校 |
| 15 | 白林荘 | 40 | 小六の分教場 |
| 16 | 無藝荘 | 41 | 旧富士見高原療養所 |
| 17 | 旧薩摩別荘 | 42 | 旧岡谷市役所 |
| 18 | 蔦木宿 | 43 | 旧境村役場 |
| 19 | 原の茶屋 | 44 | 蓼科郵便局 |
| 20 | 金沢宿 | 45 | 旧安田銀行 |
| 21 | 下諏訪宿 | 46 | 旧今井穀留番所 |
| 22 | 今井旧御小休本陣 | 47 | 弘沢の薬師堂・にょう |
| 23 | 旧片倉組事務所 | 48 | 糸萱の蔵通り |
| 24 | 旧山一林組事務所 | 49 | 新井の蔵通り |
| 25 | 下諏訪倉庫 | 50 | 長地旧中山道の生垣 |



監 修

藤森照信／建築史家・東京大学教授

編 集

(社)長野県建築士会諏訪支部50周年記念事業実行委員会／記念誌委員会

取 材

(社)長野県建築士会諏訪支部／理事、会員

撮 影

(社)長野県建築士会諏訪支部50周年記念事業実行委員会／写真展・記念誌委員会、会員

執 筆

(社)長野県建築士会諏訪支部50周年記念事業実行委員会／写真展・記念誌委員会

制 作

長野日報社

発 行

(社)長野県建築士会諏訪支部

写真提供

岡谷市教育委員会・蚕糸博物館

下諏訪町歴史民族資料館

諏訪市博物館

茅野市商工会議所

諏訪二葉高等学校同窓会

名取光昭氏

飯島和久氏

田中岐美子氏

五味和男氏

長野日報社

協 力

茅野市尖石考古館

神長官守矢史料館

信濃建築史研究室吉沢正巳氏

諏訪市立高島小学校

富士見町立富士見南中学校

掲載の承諾をいただいた建物所有者の皆様

参考文献

- 美しき日本の民家 第1巻：川島宙次著／ぎょうせい発行／1992年
 滅びゆく民家－屋根・外観：川島宙次著／主婦と生活社発行／1973年
 民家のデザイン：川島宙次著／相模書房発行／1986年
 日本民家探訪－民俗・地理学的考察：杉本尚次著／創元社発行／1974年
 民家ウォッチング辞典：吉田桂二著／東京堂出版発行／1987年
 住まいの伝統技術：安藤邦廣・乾尚彦・山下浩一著／建築資料研究社発行／1995年
 日本民家の造形：川村善之著／淡交社発行／2000年
 消えゆく左官職人の技、鋳絵：藤田洋三著／中村滋編／小学館発行
 建築探偵術入門：東京建築探偵団／文芸春秋発行
 風立ちぬ・美しい村：堀辰雄著／岩波書店発行／1956年
 S D SスペースデザインシリーズNo.4 医療福祉施設：船越徹他著／新日本法規発行
 INAX ALBUM 31「現代木造住宅論 板倉の住まい」：安藤邦廣著／INAX 発行

 信州の西洋館：藤森照信著／信濃毎日新聞社発行／1995年
 信州の建築と景観：(財)長野県建築住宅センター発行
 長野県の国宝・重要文化財：郷土出版社発行
 東海・中央高地の住まい：吉沢正巳著／INAX 出版発行／1996年
 長野県史美術建築史料編：長野県史刊行会発行／1990年
 早稲田建築学報第6号「信濃諏訪地方の民家」：今和二郎著／1929年
 月刊 山小屋 第56号別冊「南信地方の民家風景」：三沢勝衛著／1936年
 棟柱 第3号：信州伝統的建造物保存技術研究会発行／2000年
 長野建築士 '76「諏訪の古い民家より」：大宮三郎著／(社)長野県建築士会発行／1976年

 激動の写真ドキュメント 長野県民100年史 1～4巻：郷土出版社発行／1984年
 長野県公民館活動史：長野県公民館運営協議会編集委員会編／長野県公民館運営協議会発行／1987年
 諏訪の近世史：諏訪教育会著・発行／1966年
 諏訪の歴史：諏訪教育会著・発行／1968年
 諏訪の近現代史：諏訪教育会著・発行／1986年
 やまうら風土記：湯田坂正一著／長野日報社発行／1999年
 長野日報「信州建物紀行」：長野日報社発行／2001年
 街道400年企画 いま夢街道 合本：信州・市民新聞グループ／2001年
 月間ぶらざ「諏訪の史話 諏訪明神の薙鎌」：蟹江文吉著／オノウエ印刷発行／2001年
 岡谷蚕糸博物館紀要 創刊号：岡谷市蚕糸博物館発行／1997年
 おかや歴史の道－文化財めぐり：岡谷市教育委員会発行／1990年
 ふるさとの歴史－製糸業：岡谷市教育委員会発行／1994年
 シルクと金唐紙の館－旧秀林家住宅：岡谷市教育委員会発行／2001年
 渡辺三大臣と旧渡辺家住宅：旧渡辺家住宅保存協力会研究委員会編／岡谷市教育委員会発行／1992年
 諏訪市制50周年記念－写真集なつかしのあの頃：諏訪市博物館編・著／諏訪市教育委員会発行／1992年
 茅野市史：茅野市発行／1988年
 富士見高原…その詩その小説そして：富士見高原愛好会著／岩波書店発行／1985年
 高島学校百年史：高島学校百年史刊行会編・発行／1973年

昨年の10月に取材を始めた時点では、発行に数年は要するという建築写真集を半年で作ろうという無謀な挑戦でありました。しかし時間の不足を諏訪支部の豊富で優秀な人材が打ち消し、いま完成を見ようとしています。

掲載した建物は300を、写真点数は600を超えていますが、取材しながら掲載できなかった建物も数多くあり、今後これらの整理をするとともに、まだ相当数あるだろうと思われる取材漏れの建物も発掘しなければなりません。又、今回取り上げられなかった社寺建築も諏訪地方に数え切れない名建築が残されており、こちらも地道な調査を必要とします。この本のきっかけとなった「SUWAらしき宝さがし」を引き続き行い、それに充てられればと思います。

「SUWAらしき宝さがし」とは諏訪の各地を歩き、諏訪の特長を持つ素晴らしいものを建築に限らず発見しようという活動ですが、その貴重な建物などが年々姿を消し、そのスピードが最近加速度をつけて増していると感じていました。そこで50周年を期に、壊される前にせめて写真にだけでも残しておきたいと今回の企画になりましたが、この半年の間に掲載された建物のいくつかは既に解体され、不本意ながら発行前から貴重な資料となってしまいました。

諏訪人は多くの文化に曝されながらも、それを咀嚼してSUWAらしさを創り上げてきました。この一冊にまとめることによって、先人たちの創造力に満ちたアイデアが見えてきました。また、そのアイデアは諏訪人らしく合理的で、その多くは現在の建築においても充分使えるものであります。

現在の諏訪地方はもっと広範な文化に曝され、それが咀嚼されることなく丸呑み状態で諏訪地方に溢れています。時代とともに生活の形態が変化し、古いものが新しいものに替わるのを止めることは難しいことだと思います。しかし、我々諏訪の建築士が先人達に倣い、諏訪人の諏訪人による諏訪人のための建築を心がければ、SUWAらしさを取り戻すことができるのではないのでしょうか。この本がそのきっかけになることを願っています。



最後になりましたが、監修をころよくお引き受けいただいた藤森照信先生をはじめ、この企画の実現にご支援いただいた諏訪支部ならびに50周年記念事業委員会の関係諸氏、撮影・執筆・取材・編集に奔走いただいた諏訪支部の皆さん、そして掲載を快諾くださった建物の所有者の皆様に深く感謝申し上げます。

諏訪支部50周年記念事業実行委員会
記念誌委員会委員長 五味 光一

(社)長野県建築士会諏訪支部50周年記念誌
諏訪の建築 ～諏訪之國のDNA～

発行日：2002年4月26日

発 行：(社)長野県建築士会諏訪支部

〒392-0021

長野県諏訪市川上1丁目1644-10諏訪地方事務所内

TEL：0266-58-6624 FAX：0266-58-6627

E・mail：kensuwa@po.dcn.ne.jp

制 作：長野日報社

長野県諏訪市高島3丁目1323-1

TEL：0266-58-2000 FAX：0266-58-5385

ISBN4-931435-84-X C1652



(社)長野県建築士会
諏訪支部